

氏 名(本 籍)	あゆ 鮎 ざわ 澤 さとし 聡 (長 野 県)
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,916 号
学位授与年月日	平 成 10 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	医 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	生物学的コミュニケーションの理論とその臨床応用に関する研究
主 査	筑波大学教授 医学博士 三 輪 正 直
副 査	筑波大学教授 医学博士 白 石 博 康
副 査	筑波大学教授 医学博士 三 井 利 夫
副 査	筑波大学助教授 医学博士 臼 杵 勉
副 査	筑波大学助教授 医学博士 高 田 彰

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本研究は、生体の機能及び機能的障害を捉え直し、機能的疾患の治療において対症的な治療ではなく、生体の機能そのものに有効に干渉し生体の自律性を用いて治療に向かわせるための診断と治療方法の原理を明らかにすることを目的とする。

従来、生体の機能は情報伝達物質やそれに関連した受容体などにその働きを求めることが多いが、それら伝達物質は情報の担体ではあるが、生体という全体においてそれが如何に働くかは伝達物質や受容体の属性ではない。本論ではまず生体の機能を、それら担体である物質ではなく、その物質が生体において整合的に働き、秩序が生成・維持されるための働き方を与える情報系(場)として捉える。場は、生体を構成する自律的要素の相互の関わり合いすなわちコミュニケーションを通して相互創出されるものであり、機能的障害の機序もこの系に求めることができる。ここから、医師と患者が場を共有し一つの機能系となることで治療として機能系に干渉できる可能性が示唆される。過去の研究からは、これら生体のコミュニケーションにおける電磁場の介在が考えられる。

本研究では、上記の理論が臨床的に具現化されている方法として Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) をとりあげ、BDORT を電磁場を介した生体間のコミュニケーションを利用した臨床的方法、すなわち、医師と患者の場の共有を通して生体の場の情報を自律的要素の協同運動による力学的効果(筋緊張)の変化から入手する方法として位置づけ、上記の理論的考察を基に、BDORT を用いて実際に機能的疾患の治療を試みた。

(方法)

通常の薬物治療に抵抗していた頸椎捻挫(12例)・胸郭出口症候群(3例)・血管性頭痛(6例)・不定の慢性頭痛(2例)・各種疼痛性疾患(10例)・頭部外傷後片麻痺(1例)の症例に対して BDORT による治療を試み、その治療効果と効果発現の特徴を上記の理論との関連において考察した。

(結果及び考察)

(1) BDORT による臨床的治療効果

本研究で対象にした頸椎捻挫・胸郭出口症候群・血管性頭痛及び不定の頭痛、頭部外傷後片麻痺症例では、全例において症状の軽減・消失が得られた。各種疼痛性疾患においては、器質的病変が明らかな症例、また手術治

療を行っている症例において症状の改善が得られにくい傾向にあった。BDORT では画像に写りにくい生体の機能異常の同定が可能であり、また、異常な機能状態が器質的变化をもって固定化する前の早期診断・早期治療への適用が期待された。

(2) BDORT における共通した治療効果

1) 即時あるいは早期に発現する効果が認められた。これは組織の器質的修復に依存する効果とは考えにくく、自律的要素集団の協同性が円滑になったことによる効果と考えられた。

2) 愁訴以外の全身的な改善が認められた。BDORT による治療が全身の機能系に干渉し、同じ機能的異常を背景に全身の様々な部位に表出されていた機能的障害が治癒したものと考察された。

3) 鎮痛剤など対症療法的な薬剤は、臨床的效果が認められる場合でも、BDORT においては適合する薬剤と判断されなかった。BDORT により期待される効果は対症的な治療効果とは異なるものと考えられた。

4) これらの効果は、先に呈示された理論において全身の秩序生成に関与する情報系への干渉として理解が可能であった。

(3) 頭部髄液代表領域

本研究中に患者の頭頂部及び後頭部に病巣と同様の異常反応を呈する小領域が同定された。同部位が髄液と強い共鳴反応を呈することから、溶媒としての髄液ではなく髄液の状況そのものが生体の場と深い関係のあることが推測され、今後髄液が治療対象とされる可能性を論じた。本領域は髄液代表領域として報告した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究では患者に対しての医者との心理的なかわり合いを、生体の機能あるいは情報といういわば「見えない領域の治療における重要性」を扱っている。いわゆる病気の原因を器質的疾患と機能的疾患とに分けた場合に（自律神経異常を含む）機能的疾患を取り扱っている。これは東洋医学及び心理療法等の扱う領域とも共通する面があり、機能あるいは機能的障害を場、関係性、コミュニケーションという切り口から捉えることで、従来科学として扱い難かった問題にひとつの見通しを与えている。また本論ではそれらの相互作用を例えば電磁場という観点から理解を試み、またその臨床応用として BDORT を位置づけ、機能的疾患の診断と治療に用いている。BDORT の成立機序は著者自身も述べているように現時点では明確ではなく、また電磁場が関与していることも傍証としては認められるが、その具体的な実証に欠けており方法論的に問題を残す。しかし著者の提案する生体間のコミュニケーションすなわち場の共有を通じた機能状態の把握という概念は、大枠としては理解が可能であり、また本論においてはそのような理論を基にした実際の臨床成果が呈示されている点に本研究の臨床的意義を見出すことができる。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。